

市民による市民のための高麗博物館

戸田 光子・荻原 みどり・加藤 真

はじめに

- 1 高麗博物館は何をしてきたか
 - 2 市民による市民のための歴史博物館
 - 3 高麗博物館の将来像——「動」の博物館をめざして
- おわりに

はじめに

高麗博物館は“市民がつくる日本・コリア交流の歴史博物館”である。1990 年に立ち上がった「高麗博物館をつくる会」から手探りで始まった「市民による市民のための歴史博物館」が歩んだこれまでの流れを、ボランティア 3 名が手分けをして高麗博物館の過去・現在・将来としてまとめた。2026 年は奇しくも現在の地で開館してから 25 年となる年にあたる。振り返りの機会が当誌によって与えられたことを千載一遇のチャンスとして、昨今の歴史を改竄、否定する流れに最大の危機感をもって原稿作成に当たった。歴史の事実を教えられることなくシニア世代となった高麗博物館のボランティアが、これからの世代に、北東アジアの平和のために主体的に学び・伝えようとしている一端をご理解いただければと思う。以下、第 1 節を戸田、第 2 節を荻原、第 3 節を加藤が執筆した。

1 高麗博物館は何をしてきたか

(1) 「高麗博物館をつくる会」時代 (1990～2001)

高麗博物館をつくるきっかけは、1990 年 8 月 16 日の朝日新聞に掲載された、在日コリアンの書画家、申英愛^{シンヨンエ}さんの「連行慰霊碑と朝鮮美術館建設を」と呼びかける投稿だった。これを読んだ東京都稲城市の市民たちが中心になって、朝鮮半島と日本列島の交流の歴史がわかる博物館をつくらうと「高麗博物館をつくる会」を立ち上げた。当時「在日」への蔑視や差別があったことも根底にある。

はじめに「博物館とは？」を学び、自分たちはあくまでも公権力に介入されない市民の立場でつ

くることを確認し、「呼びかけ文」を作成した。日本基督教団稲城教会の牧師を務める東海林勤氏が代表となり、1992年からは教会の一室を事務局に、「呼びかけ文」を使って運動を広めていった。一人芝居「身世打鈴」^{シンセ・ダリョン}を上演していた宋富子さん^{ソンフジャ}も全国を回って「つくる会」の活動への参加を呼びかけた。

この時期は、日朝文化交流史、朝鮮史、強制連行、仏教伝来などをテーマに、多くの連続公開講座、講演会、イベント、パネル展示などを開催している。

1995年からは「歴史探訪」など学習を兼ねた「韓国旅行」も隔年で行い、好評で、長く続いた。広報として会報「高麗」を1990年12月28日創刊し、42号まで発行した。

(2) 大久保開館以後 (2001～2025)

2001年12月7日に金根熙氏^{キムグンヒ}のご厚意で新宿区大久保のビルの9階に「高麗博物館」をオープンした。金根熙氏は韓国から留学して朝鮮近現代史の研究者である姜徳相氏^{カンドクサン}の下で学んだ方で、職安通りに面した自社ビルの9階を貸してくださった。

展示室内の壁面に日本・コリア交流の歴史を語る大型パネルや安重根^{アンジュングン}の墨書が掛けられ、新羅の「金冠」、百済大香炉、朝鮮通信使行列や陶磁器や瓦などを収めたガラスケースが並び、螺鈿の立派な黒い箆笥と棚と卓子がそろった朝鮮文化コーナーもあり、立派な博物館が誕生した。

2005年に高麗博物館は9階から7階に移転し、スペースも広くなり、企画展や講演会などがよりやりやすくなった。

高麗博物館は様々な活動をしてきたが、そのうち主なものを1) 企画展 2) 連続講座 3) 講演会 4) イベント 5) その他 に分けて以下に述べることにする。

1) 企画展 (【表】「高麗博物館の企画展と内容」8, 9頁参照)

現在高麗博物館の活動の中心になっているのは企画展である。

企画展を内容で「歴史」と「在日コリアン」と「文化」とに大別し、歴史事項は①古代 ②近世 ③近代・植民地期 ④現代・戦後 の順に、いくつか特徴のあるものを紹介する。

「歴史」

①古代

古代文化の伝来に関して過去2回取り上げた。

「先進文化と技術は朝鮮半島から伝えられた！」2007年

古代史研究グループが「稲作の伝来」、「墳墓の形 (青銅器・鉄器の伝来)」、「仏教の役割」、「新羅と渤海との交流」などを取り上げて展示をした。

「鳥居・しめ縄はどこから来たか？——稲作文化とともに中国・朝鮮から」2010年

紀元前5千年、黄河流域の乾燥で民族移動が始まり、倭族という稲作民族が中国から朝鮮へ、さらに日本へと向かった。鳥居やしめ縄もその過程で日本に流れ着き根を下ろしたものだ。韓国の田舎で見かける、先端に鳥形のものがついた「ソッテ」という長い竿が鳥居に相当する。子供の

誕生した家に張られた赤唐辛子のついたしめ縄もある。グローバルな視点を加えたこの展示はメディアにたびたび取り上げられた。

②近世

〔秀吉の朝鮮侵略〕

「文禄・慶長の役と日・朝の陶磁——朝鮮陶磁^{いち}ーからの見直し」2008 年

秀吉の朝鮮侵略と焼き物に関しては2015 年「400 年前の朝鮮侵略」、2017 年にも「有田焼 400 年」と、合わせて3 回の企画展を行っている。

日本の陶磁器の始まりが文禄・慶長の役（韓国では「壬辰倭乱・丁酉再乱^{イムジンウラン・チヨヌジュラン}」と呼ぶ）で連行された陶工たちであり、金属活字、鐘、仏画などもその時奪ってきたものが多い。朝鮮に壊滅的被害を与えた文禄・慶長の役とは何だったのかを問い、「被虜人」と呼ばれる強制連行された人々の実態を取り上げた。秀吉と、この戦乱に対する日本と朝鮮の認識の差はあまりにも大きく、今日の歴史認識の対立に大きく影響している。

〔朝鮮通信使〕

「江戸時代の朝鮮通信使——260 年続いた平和の交隣関係」2019 年

日韓関係が最悪と言われた中、朝鮮通信使が260 年間続いたことを示す展示だった。対馬藩と雨森芳洲、朝鮮通信使たちが誠信を日朝外交の根本と考えていたことを改めて学ぶ機会となった。

2013 年にも「随行画員展」を開き、画員が日本人の求めに応じて絵を描き交流があったことを示すなど、朝鮮通信使は合わせて3 回取り上げている。

③近代・植民地期

〔3・1 独立運動〕

「3・1 独立運動 100 年を考える——東アジアの平和と私たち」2019 年

前年に韓国調査旅行を実施。3・1 独立運動とその背景、宗教の役割、女性の参加、新聞報道、日本人の反応、弾圧を象徴する堤岩里虐殺事件^{チエアムニ}などを展示した。3・1 独立運動が韓国の人々の心に深く刻まれ、1980 年代の民主化運動、2017 年の韓国キャンドル革命を経て今に受け継がれていることを紹介した。

「3・1 独立運動」をテーマにした展示はミニ展示を含め過去4 回行っている。

〔植民地支配〕

「植民地支配を考える『巨大な監獄』植民地朝鮮に生きる」特別展 2012 年

これは2010 年ソウルの民族問題研究所が開いた企画展で、「朝鮮総督府」、「憲兵警察」、「創氏改名」、「皇民化教育」、「強制労働」などの実態が鮮明に説明されていた。是非この展示を東京でも紹介したいと考え、2011 年立命館大学コリア研究センターで開催された日本語版の特別展をお借りして、高麗博物館で展示した。

〔関東大震災時朝鮮人虐殺〕

「関東大震災 100 年——隠蔽された朝鮮人虐殺」2023 年

箕谷^{きこく}の「関東大震災絵巻」上下 2 巻の原本を本邦初展示した。衝撃的な虐殺絵を公開できたのも市民の博物館だからこそだと言える。パネルでは朝鮮での民衆弾圧の経験が虐殺の原因になっていること、虐殺の国家責任・民衆責任を不問にしてきたことが今日の虐殺否定論・ヘイトスピーチを生み出してきたこと、地域での市民の追悼式等を示した。期間中の来館者 5,000 人超を記録し、開館以来の大ブレイクを見せた。

関東大震災朝鮮人虐殺についてはこれを含め、過去 4 回企画展をしている。

〔戦時強制動員〕

強制動員・強制労働に関しては 3 回企画展をしている。

「朝鮮人戦時労働動員（強制連行）を考える」2005 年

「海南島で日本は何をしたか——戦時朝鮮人強制労働・虐殺 日本軍『慰安婦』」2006 年

「強制連行はなかった」という世間の風潮の中、沈黙してはいけなと、この問題を取り上げた。地元の研究者や、海南島の調査をした会の協力で実現した。海南島へ連行された朝鮮人の囚人 2,000 人のうち 1,000 人は虐殺されたという。

「『強制連行』『強制労働』の否定に抗う——各地の追悼・継承の場をたずねて」2024 年

「徴用工問題を考える会」がフィールドワークで訪れた、「強制連行」「強制労働」など加害の現場とそこで犠牲者を追悼し、継承に努めている方々を紹介した。まさに群馬県が朝鮮人追悼碑を撤去したばかり、一方、山口県宇部市の長生炭鉱では遺骨発掘のため市民団体が坑道を掘り当てるといふ動きの中での開催で、注目された。

「朝鮮料理店・産業『慰安所』と朝鮮の女性たち」2017 年

日本国内に動員され炭鉱、土木工事などで重労働をさせられた朝鮮人労働者の逃亡防止や労働効率向上のため、政府の方針の下、雇用する企業が「慰安」施設を設置していたことを初めて展示した。これらの産業「慰安所」に動員されたのが朝鮮料理屋などで「売春」をさせられていた朝鮮女性たちだった。2021 年、これまでの研究を書籍にまとめて社会評論社から出版した。2023 年高麗博物館朝鮮女性史研究会に「第 27 回女性文化賞」⁽¹⁾ が贈られた。

〔被爆〕

「被爆 71 年——韓国・朝鮮人と日本」2016 年

広島・長崎での被爆者約 70 万人のうち、朝鮮半島出身者が 7 万人にも及んだことはあまり知られていない。その事実と歴史的背景、そして被爆後の補償について日本政府から排除され、そのた

(1) 女性の文化創造者を励まし、支え、感謝するため、1997 年に女性史研究者の高良留美子が個人で創設した賞。2017 年、米田佐代子氏（第 13 回受賞の「らいてうの家」館長）が継承した。

めに 40 年もの苦難の裁判闘争があったこと、今なお被爆者とその 2 世、3 世が病魔と生活苦にあえいでいることを取り上げた。

〔朝鮮に心を寄せた日本人〕

「布施辰治——朝鮮民衆と共に生きた人権弁護士」2007 年

大学在学中、台湾や朝鮮の留学生と交わっていた布施は、2・8 独立宣言の朝鮮人留学生たち、その後の朴烈・金子文子等の弁護に奔走した。たびたび渡朝し、朝鮮の労働者の弁護もした。2004 年に韓国政府から日本人初の韓国建国勲章を贈られている。期間中布施のお世話になったという人々が来られ、多くの交流が生まれた。

2008 年高史明・大石進・他 著『布施辰治と朝鮮』を刊行した。

「朝鮮の子どもたちと生きた教師・上甲米太郎」2008 年

朝鮮に渡り、朝鮮人の学ぶ学校で朝鮮語で授業をし、子供たちの貧しさと苦しみを知り、帰国後も生涯を通じて朝鮮人とともに歩んだという稀有な日本人、上甲米太郎を紹介した。

④現代・戦後

「なぜ『朝鮮人』が戦犯になったのか——戦後 80 年を迎えてなお続く植民地主義を問う」2025 年

敗戦から 80 年を迎え、高麗博物館で初めて韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯問題を取り上げた。「日本軍の犯した罪を朝鮮人・台湾人が負う」という、まさに「植民地支配」が生み出した理不尽に加え、元戦犯者の被害について政府・国会の立法責任を提示している。「同進会⁽²⁾を応援する会」がこの企画展のために改訂したパネルと同進会所蔵の多くの貴重な資料を展示している。

〔収奪・流出文化財〕

「失われた朝鮮文化遺産——植民地下での文化財の略奪・流出、そして返還・公開へ」2009 年

「朝鮮文化財の返還問題」は、当初から講演会や学習、韓国への調査活動を重ねてきた。

韓国、国立中央博物館にそびえる「敬天寺十層石塔」は、100 年も前に日本の武装集団によって解体され、日本へ搬出され、社会の非難を浴び、放置、返還、放置の歴史を繰り返して、やっと 2005 年に韓国に戻ることができたという象徴的なものだ。

〔ハンセン病〕

過去以下の 2 回行っている。

「ハンセン病と朝鮮人——差別を生きぬいて」2020 年

「ハンセン病と朝鮮人——壁をこえて」2024 年

戦後ハンセン病の特効薬が開発されたのちも、患者の隔離政策が 1996 年まで継続され、ハンセ

(2) 韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯者同進会：韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯者が 1995 年に生活保障・刑死者の遺骨送還・国家補償等を求めて結成し、現在は遺族が継承、活動している会。

ン病に対する偏見と差別がいまだに残っている。在日朝鮮人は、衛生環境や栄養状態の劣悪さのため日本人より高い比率で罹患したが、療養所内では「ハンセン病」「朝鮮人」という二重の差別を受けた。

ハンセン病に関する基本情報の他、療養所とそこでの朝鮮人の文芸活動や裁判闘争などを展示した。

「在日コリアン」

『『韓国併合』100年と在日韓国・朝鮮人（前編）——1945年まで』2010年、2012年

『『韓国併合』100年と在日韓国・朝鮮人（後編）——在日と戦後社会』2012年

韓国併合100年に際し、植民地支配を前編と後編に分けて取り組んだ。2010年当時は明治国家、韓国併合を肯定的にみなす風潮があった。植民地支配下の朝鮮人の被害が隠されていることが多く、できるだけ明示しようとした。戦後、日本に残った60万人が在日社会を形成していくが、未清算の植民地支配問題と日本の戦後責任を再認識せざるを得ない。

写真展「60～70年代の在日朝鮮人の実像——カメラマン金裕の写真集『同胞』から」2013年
金裕（1945-1998）の写真集『同胞』を基に開催した。また2018年には「在日韓国・朝鮮人の戦後——語りと写真で見る」と題して6人の在日韓国・朝鮮人の姿を写真と語りで構成する展示を行った。戦後をたくましく生きた人々の姿がよみがえった。

〔民族教育〕

このテーマで過去2回展示している。

「民族教育の今を考える——朝鮮学校を中心に」2009年

この展示では「枝川朝鮮学校の問題」への関心が高く、「枝川街の歴史と民族教育」というテーマの講演もあった。「チマチョゴリを切られた少女」の絵が展示され、朝鮮学校問題を象徴的に表していた。

「ともに生きるグローバル化の中の民族教育」2014年

社会のグローバル化が進む中で、世界や国内の外国人学校とその教育内容、高校無償化排除や、ヘイトスピーチなどを取り上げた。この展示は翌年ソウルの建国大学で開催された「民族教育展示」にハングルに訳され展示された。

在日コリアンに関しては写真展、民族教育を含め過去11回企画展をしている。

「文化」

〔収蔵品展〕

収蔵品は常設展で見ることができるが、過去2回企画展をした。

高麗博物館には数多くの資料が寄贈され、収蔵品は150点以上ある。「初めての蔵出し」2018年でそのうちの約半数を展示した。「収蔵品でたどる日本コリア交流の歴史」2023年では、日頃展示

する機会の少ない大型のもの、^{アンジュンガン キムオツキュン}安重根や金玉均の書も展示した。

〔絵本〕

「絵本で知ろう！ おとなりの国——韓国・朝鮮の絵本から」2013 年

「絵本でコリアを知る会」は2016年に「パート2」、2022年に「パート3」と過去3回企画展を開催した。毎回翻訳された絵本を大量に並べ、自由に読んでもらっている。パネルでは韓国の絵本作家たちを紹介した。

韓国の創作絵本が質量ともに発展してきた2022年の「パート3」では韓国絵本の持つ社会的メッセージ性に焦点を当てた。2013年と2016年には^{パクミニ}朴民宜氏の原画を、22年には^{ホンヨンウ}洪永佑氏の原画を展示した。

〔韓流〕

「発見！ 韓国ドラマ・映画の中の『日本』——渡来・交流そして軌轢」2019 年

「韓流文化の会」は2015年に韓国ドラマをジェンダーの視点で見る企画展を開催し、2019年の2回目は古代から近現代まで日本がどう描かれているかに注目した。差別を扱った「^{ベクチョン}白丁」に見られるように、韓国ドラマは社会性を持っている。期間中毎月末に1本ずつ映画を上映し好評だった。

〔GAKUBI 選拔展〕

「GAKUBI 選拔展」2022 年

GAKUBI 展は「在日朝鮮学生美術展覧会」の通称で、全国の朝鮮中高級学校の美術部の生徒たちの作品展で、絵画の他、立体作品、映像作品もある。2022年には37点、25年「同 PART II」では35点の作品を展示した。作者たちのアーティストトークには多くの人が訪れ、自作に込めた思いを語る在日中高生の声を直に聞くことができた。

文化関連では、他に朝鮮絵画、錦絵、切手・紙幣、絵葉書、歴史地図展、絵手紙などを含め16回開催している。

〔企画展以外の展示〕

現代トピック

現代の問題をパネル4枚程度にまとめてタイムリーに展示しようと考え、2021年に始めた展示である。「明治日本の産業革命遺産」のユネスコ世界遺産登録後の問題、「ヘイトスピーチ」、「朝鮮学校に対する無償化排除」などを取り上げてきた。

この日何の日？

「4月3日この日何の日？」といったテーマで、日にちを糸口に、韓国・朝鮮に関する文化、歴史上のできごと、人物などを紹介する小さな展示でほぼ毎月更新している。詳しくは持ち帰り用配布物で対処している。

【表】高麗博物館の企画展と内容（2001 年開館～2025 年 8 月現在）

年	企画展タイトル	歴史				在日	文化
		古代	近世	近代	現代		
2002	ミニ企画展：写真は語る「在日韓国、朝鮮人の生活史」					◎	
2003	新版高校歴史教科書の問題点，3・1 独立運動			◎			
	ミニパネル展「描かれた朝鮮人虐殺」			◎			
2004	在日写真展「川崎のハルモニ・ハラボジ」					◎	
	関東大震災朝鮮人虐殺と新聞報道			◎			
2005	日本、韓国、朝鮮の切手・紙幣で歴史と文化を知る			○			◎
	富山妙子版画展——光州事件 25 周年に				◎		
	朝鮮人戦時労働動員（強制連行）を考える			◎			
2006	海南島で日本は何をしたか——戦時朝鮮人強制労働・虐殺 日本軍「慰安婦」			◎			
	日本政府が謝罪するまで死なないぞ！			○		◎	
2007	先進文化と技術は朝鮮半島から伝えられた！	◎					
	布施辰治——朝鮮民衆と共に生きた人権弁護士			◎	○		
	錦絵から見た幕末，明治の東アジア観 * 1			◎			
2008	文禄・慶長の役と日・朝の陶磁——朝鮮陶磁一からの見直し		◎				
	朝鮮の子どもたちと生きた教師・上甲米太郎			◎	○		
2009	浮島丸事件と日本の戦後責任——隣人への信義を守れ				◎		
	民族教育の今を考える——朝鮮学校を中心に					◎	
	日・韓こども絵画展						◎
	失われた朝鮮文化遺産——植民地下での文化財の略奪・流出，そして返還・公開へ					◎	
2010	苦闘する対馬と朝鮮通信使——高山文孝小説「海の灯」さし絵原画展		◎				
	鳥居・しめ縄はどこから来たか？——稲作文化とともに中国・朝鮮から	◎					
	「韓国併合」100 年と在日韓国・朝鮮人（前編）——1945 年まで			○		◎	
2011	焼肉・キムチ大好き！——在日の食文化と日本					◎	○
	絵葉書で知る朝鮮——1945 年まで			○			◎
	10 年の歩み——展示パネル紹介						
2012	「韓国併合」100 年と在日韓国・朝鮮人（前編）——1945 年まで（再）						
	「韓国併合」100 年と在日韓国・朝鮮人（後編）——在日と戦後社会				○	◎	
	植民地支配を考える——「巨大な監獄」植民地朝鮮に生きる * 2			◎			
2013	朝鮮通信使随行画員展——画員たちはどんな絵を描き残したか		◎				
	学び合うハルモニたちの作品展——おもいはふかく						◎
	60～70 年代の在日朝鮮人の実像——カメラマン金裕の写真集『同胞』から					◎	○
	絵本で知ろう！ おとなりの国——韓国・朝鮮の絵本から						◎
2014	詩と絵でつづる女性抗日独立運動家展			◎			
	布施辰治展（再）						
	ともに生きるグローバル化の中の民族教育					◎	
	ひたむきに生きた朝鮮・韓国の女性たち			◎			
	焼肉・キムチ大好き！（再）						

年	企画展タイトル	歴史				在日	文化
		古代	近世	近代	現代		
2015	朝鮮絵画 ユーモアと個性にあふれた隣人の絵心		○				◎
	韓流 女性たちが拓く新たな交流——韓国ドラマで見るジェンダー						◎
	400 年前の朝鮮侵略		◎				
	日韓国交正常化 50 年を問う				◎		
2016	絵本で知ろう！ おとなりの国 パート 2						◎
	被爆 71 年——韓国・朝鮮人と日本			◎		○	
	侵略に抗う不屈の女性たち——詩と画でつづる独立運動の女性たち			◎			
2017	鄭周河写真展「奪われた野にも春は来るか」				◎		
	有田焼 400 年 望郷と同化のはざままで		◎				
	朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち			◎			
2018	初めての蔵出し 高麗博物館収蔵品展						◎
	在日韓国・朝鮮人の戦後——語りと写真で見る				○	◎	
	関東大震災 95 年 描かれた朝鮮人虐殺と社会的弱者			◎			
	朝鮮通信使随行画員展（再）						
2019	3・1 独立運動 100 年を考える——東アジアの平和と私たち			◎			
	李光平写真展 植民地期朝鮮から「満洲」へ渡った朝鮮人移民発見！ 韓国ドラマ・映画の中の「日本」——渡来・交流そして軋轢			◎			◎
	江戸時代の朝鮮通信使——260 年続いた平和の交隣関係		◎				○
2020	ハンセン病と朝鮮人——差別を生きぬいて				◎	○	
2021	朝鮮ゆかりの歴史地図						◎
	子どもの絵手紙交流展						◎
	20 周年企画展「わたしたちの 31 年——共生社会の実現を目指して」						
2022	GAKUBI 選抜展						◎
	江戸時代の朝鮮通信使（コロナ禍で中断後の再開）（再）						
	絵本で知ろう！ おとなりの国 パート 3						◎
2023	収蔵品でたどる日本コリア交流の歴史						◎
	伊藤孝司写真展「平壤の人びと」				◎		
	関東大震災 100 年——隠蔽された朝鮮人虐殺			◎			
2024	ハンセン病と朝鮮人——壁をこえて				◎	○	
	「強制連行」「強制労働」の否定に抗う——各地の追悼・継承の場をたずねて			◎			
2025	GAKUBI 選抜展 PART II						◎
	なぜ「朝鮮人」が戦犯になったのか——戦後 80 年を迎えてなお続く植民地主義を問う				◎		
◎の企画展の数（総計 62）		2	6	19	8	11	16

内容が一つに絞れないものが多く、主たる内容に◎、他の内容に○を付した。

「10 年の歩み展」, 「20 周年企画展」, 及び再展示は分類の対象外とした。

* 1 姜徳相氏コレクション

* 2 ソウル民族問題研究所の展示を基にした立命館大学コリア研究センターの展示を借用

2) 連続講座

①連続文化講座

連続文化講座として2005年から08年にかけて朝鮮の楽器・歌・舞踊などの講座が開かれ、音楽・舞踊・交流の歴史の講座も開かれた。

2006年の文化講座では『朝鮮人軍夫の沖縄日記』の朗読劇が上演された。『日記』は沖縄に徴用された金元栄^{キムウォニョン}氏が米軍捕虜となるまでのほぼ2年間、その苛酷な体験をひそかにタバコの空き箱に書きつづったものだ。これを翻訳した岩橋春美氏が朗読劇のシナリオを作った。これは大変感動的な舞台になり、2010年には沖縄県内3か所で、この朗読劇を公演した。

②在日連続講座

2005年「在日コリアンは語る」という連続講座が始まり、現在まで続く、在日の方々の生の声を聞かせてもらえる場となっている。初期のころは在日一世の方もおられたが、現在では二世か、三世の方がほとんどだ。いくつか紹介したい。

^{ソウウォンス}
徐元洙さん 2006年：在日一世

総督府勤務の経験から朝鮮人差別を記した手紙を理由に治安維持法で捕まった。人権侵害に対する謝罪と補償を求め2005年小泉首相に勧告書を出した。「日本政府が謝罪するまで死なないぞ!」という徐さんの人生の軌跡を示す企画展の初日に講演した。

^{パクボンネ}
朴鳳礼さん 2011年：川崎ふれあい館のハルモニのひとり

父母が亡くなり親戚に預けられていたが5歳の時、「兄ちゃんたちが徴用されている日本へ行きなさい」と言われ、叔父さんが行き先を調べ、どこで船を降りるか、どこで汽車に乗るか、全部チマチョゴリの背中に墨で書いてくれた。お前はどこに行くんだと言われても、言葉が分からないから、これ見てちょうだいって。……それから朝鮮のチマチョゴリを着たおばさんが来たから私は飛びついたんですよ。「おばちゃん」って。——それから苦労話は続く。

^{ムンソンヒ}
文聖姫さん 2022年：在日二世

周囲の反対を押し切り青山学院大学に進学し、『朝鮮新報』記者として“拉致の真相究明を”と書いた後、退社し、56歳で博士号を取得したことをユーモラスに語った。多くの壁を乗り越え初めて選挙で選ばれた『週刊金曜日』編集長の話だった。

3) 講演会

「つくる会」時代から講演会開催は活動の大きな柱の一つだ。企画展に関連した講演会やギャラリートークも行っている。

東海林勤氏 2008年

「今問いなおす、韓国民主化運動と日本市民の関わり」というタイトルで講演した。韓国軍事政

権下の71年の「徐勝・徐植兄弟事件」^{ソスン チュンシク}、73年の「金大中事件」後の韓国民主化運動の進展の中で日・韓を往来しながら在日政治犯の救援活動に奔走した一人の日本人として、韓国との出会い、人々との出会いの中から日韓の歴史的関係を問うた。まさに危険と隣り合わせのほとんど知られていない現代史の緊迫した一コマ一コマを語ってくれた。

崔江以子氏^{チュカンイジャ} 2017年、2022年

2017年の講演会では、「ヘイトスピーチを止めた街から」と題して、2013年から川崎にヘイトデモがやってくるようになり、住民が立ち上がって、2016年に「ヘイトスピーチ解消法」が成立した話をした。息子さんの「母を助けてください」と泣く映像もあった。

2022年には刑事罰付きの「川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例」が2019年公布、2020年全面施行されたことを報告し、市民が「一点共闘」で禁止条例を作ったと強調した。

4) イベント

高麗博物館は大きなホールで講演、映画、演劇などのイベントを開催してきた。楽しみにしてくれる会員も多く、高麗ならではのイベントの開催を心がけている。

「10周年記念イベント」2012年（四谷区民ホール）

宋富子氏の講演の他、「ソリマル」（韓国忠清北道教師国楽会）による伝統音楽演奏もあった。これは2011年の東日本大震災後、「ソリマル」から励ましの公演提案があり実現したものだ。

「20周年記念イベント」2022年（牛込区民笹井ホール）

映画『私はチョンソンサラムです』上映と落合恵子氏講演「私たちの共生とは」

コロナ禍で3年ぶりとなったイベントは、第1部が在日1世から4世まで様々なチョンソンサラム（朝鮮人）が登場し、尊厳をもって生きる姿を追った映画だった。第2部の講演はフェミニズム運動のリーダー的存在、落合恵子氏に依頼した。狙いは当たり、今までと違う新しい層が見に来てくれた。

〔2023年新宿区後援不許可について〕

イベントで新宿区の施設を利用する際は区の後援を得ることができていた。但し2023年を除く。2023年のイベント「関東大震災から100年の今を問う」に新井勝紘元館長の講演「関東大震災描かれた朝鮮人虐殺を読み解く」と徐京植氏^{ソキョンシク}の講演「韓国現代アーティストの映像作品に見る『ルワンダ虐殺の記憶』」があった。例年通り後援を申請したが、区は「区の施策の方向性と異なるものであることから後援することはできない」と回答した。何度も理由を問うたが、同じ回答を繰り返した。館は区に対してイベントの後援不許可の説明責任を果たすことを求める要請をし、ホームページ上に発表している。

区の姿勢は虐殺を隠蔽する国や、朝鮮人犠牲者追悼式典に追悼文を送付しない都知事の方針をなぞったものと考えざるを得ない。

5) その他

〔出版〕

「高麗博物館会報」2001年12月創刊，2025年7月時点で71号まで発行している。

「図録」は企画展で展示したパネル原稿に資料などを追加して冊子にしたもので，企画展では多くの場合発行している。

『市民がつくる日本・コリア交流の歴史』2002年

「朝鮮と日本の交流の歴史」と「在日」について，高校生にわかるようにと対話形式で編集，明石書店から単行本を刊行した。

『布施辰治と朝鮮』2008年

企画展関連の高史明，大石進氏の講演録と李圭洙^{イギョス}，李煥娘^{イヒョンナン}氏の論考を1冊にまとめ，高麗博物館から発行した。

『朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち』2021年

朝鮮女性史研究会が同名の企画展の際に調査したものを一冊にまとめ，社会評論社から出版した。

〔映像〕

「日本とコリアの交流史——高麗博物館編」

2021年館内リニューアルをきっかけに映像コーナーを設け，古代から現代までの日本とコリアの交流史を約20分の映像にまとめた。常設展示の壁面にテレビモニターを設置し，来館者に最初に見てもらうようにした。

現在はこれ以外の企画展関連の映像を流すことも多く，来館者に椅子に座ってじっくり見てもらっている。

〔大久保街歩き〕

グループを対象に多文化共生の視点で大久保の街歩きを案内している。ガイドの人材不足という課題を抱えている。

〔朝鮮ゆかりのフィールドワーク〕

高麗博物館として定期的に行うことになった。

「東武伊勢崎線の金玉均を訪ねて」や「多摩の朝鮮ゆかりの古墳巡り」を実施した。

（とだ・みつこ 認定 NPO 法人高麗博物館理事／徴用工問題を考える会）

2 市民による市民のための歴史博物館

高麗博物館が現在の新宿区大久保の第2韓国広場ビルに開設したのは2001年12月のことだ。その前の10年間は「高麗博物館をつくる会」として東京都稲城市を中心に市民の地道な活動がベースにあった。その先輩たちの努力には心から感謝しつつ、2002年の会報（開館記念号）にある文章の中で現在とつながるメッセージを紹介する。

高麗博物館は、市民の手で設立され市民の手で自由に運営される博物館です。（中略）高麗博物館はなによりも市民同士の交流を重視する博物館です。公立の歴史博物館のように来館者に知識を一方的に与えるのではなく、市民が発信し市民同士が意見を述べあって、展示情報をさらに充実させていくことを目指しています。（後略）

24年前に設立された小さな博物館に寄せた第一世代の想いを引き継ぎ、その延長線上で活動している私の体験を述べさせて頂き「市民の手で運営されている博物館」の実際を知って頂ければと思う。

筆者（荻原）が高麗博物館のボランティアとなったのは11年前の2014年で博物館の前の職安通りで毎週末ヘイトデモがあった頃だ。新聞でデモのことを知り一度見に行かねばと思っていた。というのは、若い頃に在日コリアン2世の女友だちと一緒に仕事をし、初めて在日への差別を知った。一緒に不動産屋に行っても契約時には彼女は在日ということで契約できないと言われ、日本人の私が契約をした。外国人登録証の入ったポーチを盗まれ、再度作成しなければならなくなった時、10指に黒いインクで押捺する屈辱に耐えられないと押捺拒否をした友人を応援した。しかし、その時は女性解放の運動にのめりこんでいたため歴史の勉強を怠っていた。それが数十年経ってヘイトデモとなって眼前に現れたのだ。自分の後ろめたさから歴史をきちんと勉強しなければと思っていたところに高麗博物館との出会いがあった。ボランティアとなり受付をしていた時、出入口にある高麗博物館の目的という額に気付いた。

- ①日本とコリア（韓国・朝鮮）の間の長い豊かな交流の歴史を、見える形で表し、相互の歴史・文化を学び、理解して友好を深めます。
- ②秀吉の二度の侵略と近代の植民地支配の罪責を反省し、歴史の事実に向かい、日本とコリアの和解をめざします。
- ③在日韓国・朝鮮人の生活と権利の確立を願いながら、在日韓国・朝鮮人の固有の歴史と文化を伝え、民族差別のない共生社会の実現をめざします。

この〈3つの目的〉がバラバラになっていたものが一気に形となって見えたような感じで背中を押された気がした。

以前は在日の友人を支える形だったが、日本人がヘイトをしているので日本人が中心になって日本人に働きかけないとダメだと直感的に感じていた。その点、高麗博物館は多くが日本人ボランティアで企画・運営を行い、どこからの補助も受けず会員の会費と寄付、1名500円の来館料と講

演会やイベントの収入だけで何とか運営している。

ここからは、2024 年企画展『『強制連行』『強制労働』の否定に抗う——各地の追悼・継承の場をたずねて』（2024 年 7 月 4 日～2025 年 1 月 26 日）について述べる。

（1）「市民の手による博物館」は常に試行錯誤

1) 企画展計画から実行まで

一般市民の私たちが企画展のテーマを決めるきっかけは「これっておかしいよね」という疑問や怒りから始まることが多い。

2020 年 7 月、「明治日本の産業革命遺産」のユネスコ世界遺産登録が決まり新宿に設立された産業遺産情報センターを見学した。戦時中、長崎県の端島（軍艦島）で朝鮮人と日本人は仲良く一緒に働いていたというセンターの偽りの説明を聞き、まさに怒髪天を衝く状態になった。

コロナ禍だったが、12 月に長崎まで有志でフィールドワーク（以後 FW と略）に行った。ユネスコ世界遺産登録に至ったのは安倍晋三元首相と幼馴染の加藤康子センター長との関係なくしてはあり得ないことを多くの人に伝えようと 2021 年 2 月～7 月、ミニパネル展と講演会を企画した。

その後、同じメンバーで強制連行についてもっと勉強しようということになり、バイブルとも言われている朴慶植^{パクキョンシク}著の『朝鮮人強制連行の記録』の読書会を始めた。ある時、倉庫で第一世代の先輩たちが神奈川県の相模湖ダムの追悼碑の前で撮った記念写真を見つけた。鬼籍に入られたり老人ホームに移られた方たちの顔を見て、私たちも外に出ていく必要があると感じた。

追悼式や継承活動を続けている各地を訪ね、歴史や活動の内容を直接聞かせて頂き、それを都会の人たちに伝えるのが良いのではないかという話になり、そこから私たちの企画展の方向は決まっていた。「徴用工問題を考える会」と名付けた。それからの活動を時系列で記す。

2021 年	12 月：相模湖・ダム追悼碑 FW
2022 年	2 月：山口県長生炭鉱慰霊祭参加
	6 月：秋田県大館市「花岡事件」追悼集会参加
	7 月：相模湖・ダム追悼式参加
	10 月：笹の墓標展示巡回展実行委員となる（築地本願寺）
	12 月：群馬の森追悼碑 FW
2023 年	3 月：兵庫県宝塚慰霊式参加
	7 月：富山県黒部第 3 ダム・不二越 FW
	10 月：九州大牟田、飯塚市「無窮花」慰霊式、北九州市 FW
2024 年	4 月：松代大本営 FW
	その他、個別に訪問した場所は奈良県柳本飛行場跡、広島県安野発電所追悼集会、北海道朱鞠内「笹の墓標強制労働博物館」開館式などがある。

2) 歴史学習の市民アマチュアゆえの失敗

高麗博物館初期の頃は歴史学の専門家が研究会の相談や指導的な立場に立っていた。しかし、20 年も経つとみんな歴史学習の市民アマチュアだ。市民が自ら学ぶために集まるのが目的なのだから

当然であり良いことなのではあるが、私たち研究会メンバーも手探りで本を探しては皆で読み、集会、オンライン講座などで自習をしていた。

チラシ 1 万枚の破棄

1990 年代後半から一層右傾化した安倍派の影響で 2021 年には教科書から「従軍慰安婦」「強制連行」の文字が消され、「慰安婦」「徴用」とされるようになってしまったが、会では「強制連行」の文字にこだわっていた。

そこで企画展タイトルも『「強制連行」『強制労働』の否定に抗う』とし、チラシのキャプションも初回は次の文言とした。

戦後最悪と言われた日韓関係には「徴用工問題」が横たわっています。しかし、徴用工の強制労働は戦時だけでなく、朝鮮半島の植民地化から始まっています。（後略）

しかし、この文言に関して専門家の意見で誤解を招くような表現をしないように注意するほうが良いと言われた。修正のポイントは、徴用工の強制労働の時期であった。徴用工の強制労働は、戦争中の労働力不足を補う 1939 年のことで、朝鮮半島植民地化（韓国併合）の 1910 年からではなかった。1 万枚のチラシを破棄することにした。下記は修正文言だ。

戦後最悪と言われた日韓関係には「徴用工問題」が横たわっています。その問題を解決するには、まず、朝鮮の植民地支配を認めなければなりません。（後略）

ある歴史研究家から疑義が・・・

私たちの FW の中でもほとんど知られていないローカルな朝鮮人犠牲者の追悼式のパネルに関してある研究家から疑義が出た。兵庫県宝塚市、神戸市の鉄道工事現場での歴史（1910 年代～20 年代）を他の強制労働のパネルと一緒に紹介していたことが目に留まり厳しく指摘された。

私たちが歴史学という専門分野に疎く時代区分や定義などに無知だったために起きたミスだ。その後、指摘を受け止めこのパネルを何としても紹介したいと伝えたところ、「強制動員前史」という見出しを新設することをアドバイスされた。

そこで修正したパネル原稿を確認してもらうつもりで原稿発注メ切りギリギリの時点で全てを送った。すると私たちの 20 枚以上のパネルを全て点検、修正をして送り返して下さった。結果としては監修をして頂いたことになった。ご本人はかなり集中して点検したので疲労困憊されたとのメールが後に送られてきた。心から感謝をしている。

3) 市民だからこそつながった連携・連帯

展示について

2021 年以降の右翼の圧力により群馬県の「記憶 反省 そして友好」の追悼碑が 2024 年 1 月に山本一太県知事による行政代執行で破壊された。この事実は歴史に詳しくない人たちにもマスメディアを通して知られた。研究会のメンバーの一人が群馬出身であることから地元の活動グループ

との関係もあり、はじめは1ヶ月間追悼碑の模型借用という話だったが、来館者の関心が強く、事件を「忘れない」ために追悼碑の模型を全期間中展示できた。

その他、展示パネル前に関連資料として本や地元の新聞記事などを配置した。期間中に遺骨発掘に着手した長生炭鉱についてはリアルタイムに届く情報を展示したので特に関心が集まった。

映像コーナーについて

- ・ 韓国の民族問題研究所から強制労働被害者の貴重な証言映像が提供された。
- ・ 韓国のTV局制作の「ナカガワとタカハシ」は朝鮮女子勤労挺身隊についての歴史と裁判を描いていて日本の地道な支援団体の様子を知る希少な映像だ。
- ・ 山口県長生炭鉱の手作り超短編映像は遺骨発掘着手以前のもので今では地形が変わっている。

講演・ライブトークについて

高麗博物館は低予算のため講演会を毎月行うことは原則的にしていなかった。しかし私たちは著名な専門家の話を聞くだけでなく各地で地道に追悼・継承活動をしている無名の人たちから話を聞いて、来館者が現地に足を運んで日本の加害の歴史に向き合ってほしいと願っていた。有名・無名の全ての講演者に率直に話し、低額予算しか出せないが是非とも都会の人たちに追悼碑の事や活動を知らせたいと交渉した。全員が条件を了解して下さり毎月のトークが実現した。その代わりに著書などの販売に力を注いだり来館者に交通費カンパをお願いした。トーク後の懇親会を毎回行ったところ、すごい熱気で講演者との距離が縮まったようだ。各地の運動と都会の人たちとのパイプをつなぐという目的を少しは果たせた気がしている。

4) 企画展を終えて

予想以上に来館者が多く、特に若い人たちの来館が多かった。7ヶ月間の来館者数は2,199名で1日平均15.4人と高麗博物館の入館者数としては多いほうだ。嬉しいことに朝鮮学校からの団体見学が100名を超えた。大学のゼミで展示を見てレポートを書くということもあり、熱心にパネルを読んでいる大学生の姿も見かけた。

次に10代から70代までのアンケート回答からの抜粋を紹介する。

- ・ 10代：何も知らなかった自分が恥ずかしいと感じた。何も知らないで韓国文化を楽しむことはできないと思うから。
- ・ 20代：日本人の方々が日本と朝鮮の負の歴史を継承するために主体的に行動されていることを改めて知り、当事者である在日朝鮮人の自分が行動する責務があると同時に勇気をもらえました。
- ・ 30代：各地域で歴史を正しく語りつぐために時に危険な目に遭いながらひたむきに戦ってきた人々の存在がよくわかりました。それぞれの連絡先やHPを載せてくださっているので自分でも勉強しようと思います。
- ・ 40代：（前略）日本の歴史の問題を知り考える時、隣国の朝鮮のことを知ることが重要だとうやうく分かってきた。
- ・ 50代：（前略）近現代の黒歴史を加害国である日本がいくらとりつくろっても真実は変わらない。やはりもっと学んでいくことが大事であると再度確認できた。

- ・60代：日本各地に強制労働を強いて出来あがった地があり、それを知らずに今の我々は豊かな暮らしをしていた事を思い知らされました。
- ・70代以上：品川駅港南口に三菱重工業があり、長い間支援する方々の事を見ていました。（筆者注：名古屋三菱・朝鮮女子勤労挺身隊訴訟を支援する会の金曜行動のこと）

（2）「市民の手による博物館」の現在

ここまでは企画展実施の実態の一例だが、実は一時、博物館の方向性について大きな議論が起こった。

2023年4月に「高麗博物館をつくる会」時代から関わってこられた人たちの一部から突然、博物館法改正（2023年4月1日施行）にあたり、これまで高麗は博物館類似施設だったが指定施設を目指すべき、そして、早急に学芸員を雇用すべきとの提案が出た。

第一世代の先輩たちの基本方針は「公が入ると展示内容に干渉されると考えました。あくまでも市民立で、との姿勢で進めることが確認された」（関口澄子、「緑の下の方持ちから」『高麗博物館15周年記念誌』10頁、2016年）である。しかも「今回の博物館法改正では、審査や更新審査の最終手段として、教育委員会による【命令】権が付与された」との説明もあり、ますます市民の主体的な自由な活動を奪われる可能性があると思った。

そこで、東京学芸大学の博物館学専門家の君塚仁彦教授にレクチャーをお願いした。君塚氏は「歴史を逆なでする博物館」（『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』73集、2022年）で、歴史修正主義の暴力に抵抗する博物館、歴史の被害者を記憶し、それを継承し、想像力を働かせる場としての存在意味がある」という博物館観を示している。話し合いを重ねた末、指定施設の博物館は現在の高麗には当てはまらないという結果に落ち着いた。

ふり返ってみると、この年恒例のイベントに毎年後援をしていた新宿区は理由を明確にしないまま後援をしなかった。「関東大震災 描かれた朝鮮人虐殺を読み解く」のタイトルの「朝鮮人虐殺」の文言があったからかもしれないが不明だ。この企画展は元館長の新井勝紘氏所蔵の絵巻展示が評判となり高麗始まって以来の最多の来館者数を記録した。この企画展が、来館見学者の層を変えた。「歴史を知っている人が行く博物館」から「歴史を知らない人が歴史を知るために行く博物館」になった。

「朝鮮人虐殺」の語をためらうことなく使える自由（＝博物館類似施設）を大切にしたい。

現在の高麗博物館は元気だ。

10以上の研究会がそれぞれのテーマの学習を続けていて、休館日には各研究会が館内のあちこちで開かれ、活発な議論が交わされている。以前は赤字を脱出するために行った夏のイベントは恒例行事となり、高麗を経済的に支えているだけでなく幅広い人たちが在日の歴史や文化に触れる機会となっている。今年度は、理事に在日コリアンの方が3人となり、運営委員にニューカマーの方が1人が加わり複眼的になった。

「国」「国境」とは何か？ を真剣に考えている日本生まれの在日の子どもたち
歴史の事実を教えられずのほほんと大人になってしまった日本人の自分
さまざまな気づきに出会う「市民による市民のための歴史博物館」
試行錯誤と紆余曲折の中で高麗博物館は大切な場所になった

(おぎはら・みどり 認定 NPO 法人高麗博物館理事／微用工問題を考える会)

3 高麗博物館の将来像——「動」の博物館をめざして

日本も参加している ICOM (International Council of Museums, 国際博物館会議) の博物館の定義は「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、楽しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する」⁽³⁾ としている。つまり、非営利で、一般に公開され、誰もが利用でき、多様性や持続可能性を育成し、地域コミュニティと共に情報や知識をシェアしながら活動する社会教育機関という位置づけが意識されているのである。

その意味で、発展途上にはあるが高麗博物館は、当初から一貫して、市民による寄付やボランティアによって運営されて設立からまもなく 25 年、日本社会のなかで見えにくくされてきた朝鮮半島の歴史、文化、時には声を掘り起こし、紹介してきた活動を背骨にして、様々なテーマで展示、調査・研究、そして講演等のイベント開催と活動を広げているという観点からすれば、上述の定義に沿ったものと言えよう。

今、私たちは新たな時代の節目に立っている。ヘイトスピーチや歴史修正、歴史否定の言説がネット空間や公的領域にも浸透し、在日コリアンやマイノリティに対する差別が根強く存在する状況にある。そのなかで、博物館の社会的意義が一層問われていると言えよう。

この現実を前に、これからの高麗博物館が目指すべき将来像は、市民によって担われる三つの柱—— 1) 歴史博物館、2) 平和博物館、3) 人権博物館としての機能を強化し、それらを横断する実践の場としての「動」の博物館になることであろう。

第一の柱である歴史博物館としての役割は、過去の展示にとどまらない。一次資料と二次資料を組み合わせ、証言や残された映像なども活用しながら、「記録されなかった歴史」「声を奪われた人々」の存在を社会に提示し、歴史の空白を埋める作業を継続していくことが求められるだろう。これまでに研究者や市民たちが地道に調査、収集してきた資料、証言、在日朝鮮人の戦後史の整理などは、博物館に蓄積された人的・物的資源を活かし、他団体、研究者、市民との連携を進める中で深化させることができる。

(3) ICOM Japan Web サイト <https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/> 最終アクセス日：2025 年 6 月 23 日

第二の柱である平和博物館としての高麗博物館は、戦争加害の歴史を記憶にとどめ、現在進行形の植民地主義や軍事化の問題と関わる必要がある。朝鮮半島分断の問題、在日コリアンの生と抵抗、そして日本社会の構造的な排外主義とどう向き合うか——平和のための博物館とは、「平和を語る空間」ではなく「平和をつくる実践の場」であるべきだろう。分断されたままの朝鮮、中国、台湾、沖縄、在日コミュニティなどとの連携を深め、東アジアの市民社会による共同の記憶と対話の場をつくることも必要となろう。さらには世界で今なお続く戦争や虐殺の現場にも目を向け、平和追求に力を尽くす市民たちとも歩む場でありたい。

第三の柱である人権博物館として、当館が果たす役割は極めて切実なものである。民族差別に限らず、ジェンダー、障害、階層、移民、在留資格など、複合的な差別と排除に抗する視点が求められている。歴史展示と同時に、現代を生きる当事者の声を展示やイベントを通じて発信していく。とくに在日の若い世代、ニューカマー、そして多彩な協力者や支援者とのつながりを重視し、多様な立場から差別を可視化し、共に変えていく拠点でありたい。

こうした三つの柱を貫くのが「動」の博物館という考えである。来館者が展示を「見る」ことだけでなく、対話・交流し、考え、行動につなげていく博物館。展示を通じて問題意識を持った来館者が、講演会、ギャラリートーク、フィールドワーク、ワークショップに参加し、時には運営にも関わるという循環をつくる。「歴史を学ぶ場」から「学んで動く場」へ。私たちはその実験と実践を続けていきたい。つまり、「第一世代（コレクションを元にした古典的博物館）から第二世代（資料の公開を運営の軸とした従来型の博物館）、そして第三世代（市民参加・体験を運営の軸とする博物館）へと発展した博物館」⁽⁴⁾ からさらに先に進む将来を作ることが目標となる。

（かとう・まこと 認定 NPO 法人高麗博物館理事／微用工問題を考える会）

おわりに

今回、提言した「動」の博物館の実現には、制度や資金の裏付けがない分、不断の市民同士の関わりと、広範なネットワークの形成が鍵となる。幸いにも、高麗博物館はその土壌を作りつつある。今後さらに情報のアーカイブ化や資料のデジタル化、研究と展示の融合、市民研究者の育成などの課題に取り組み、国内外の市民がつながるためのハブとしての機能、発信拠点となる道を模索することになろう。

私たちの博物館は小さくとも決して孤立してはいない。各地の追悼・継承の現場や歴史の継承に取り組む博物館、資料館、研究者、市民と連携し、日本の加害責任と正面から向き合い、アジア、世界の人々と共に記憶を編み直すための「動」の拠点としての高麗博物館の未来を拓いていければと考える。

(4) 伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館、2007年第七刷、143-145頁図表参照。